

黄疸

Jaundice : Icterus

黄疸は病気の名前と言うよりはさまざまな病気の一症状と考えて頂いたほうが良いかと思います。

黄疸とは血液中にビリルビンという物質が正常範囲以上に存在する状態で、皮膚や粘膜、体液などが通常より黄色くなります。主に様々な肝臓疾患や胆道疾患、血液疾患により起こります。

黄疸はその原因により、大きく肝性黄疸、閉塞性黄疸、溶血性黄疸に分けることができます。

原因

肝性黄疸の原因には、肝炎、肝硬変、うっ血肝、ウイルス(犬伝染性肝炎など)、細菌(レプトスピラ症)、原虫(トキソプラズマ)、寄生虫(フィラリア)、腫瘍、肝リポドーシス、薬品、炎症などがあります。

閉塞性黄疸は膵炎、腫瘍、腸閉塞、胆石、寄生虫、手術の合併症などにより胆管が物理的に閉塞されるために起こります。

溶血性黄疸は先天性、あるいは後天性の溶血を起こす疾患により赤血球が壊され、肝臓の処理能力を越えるビリルビンが多量に作られるために起こります。その主なものは、免疫疾患、中毒(たまねぎ中毒など)、感染症、細菌(レプトスピラ症)、寄生虫(フィラリア)などです。

症状

皮膚や粘膜などが通常よりも黄色くなる。得に歯茎や皮膚の白い部分、陰部、眼などが分かりやすいと思います。

その他黄疸の影響により、食欲不振、虚弱、異常な色の尿、体重の減少などが見られます。

診断法

黄疸がひどい場合には見ただけでも診断できますが、前述のように黄疸にはたくさん原因があります。見た目でも黄疸だと診断できても、原因や黄疸のタイプをつきとめなければ何の意味もありません。そのためには症状や状態にあわせて、血液検査、尿検査、レントゲン検査、超音波検査、組織検査、試験的開腹といった直接お腹を開けて検査する方法などが必要です。

治療法

治療方法は原因により様々です。詳しくは各疾患を参照して下さい。一般的に強肝剤、利胆剤、点滴、ケージレストなどの安静、処方食などにより治療します。もちろん手術が必要なものや抗生物質の必要な感染症など様々です。

自宅での看護法

獣医師の指事にしたいケアしてあげてください。お家でできることや注意すべきことはその病態により様々です。

状態や必要であれば肝臓疾患用の処方食を用いると治療の助けになるでしょう。主治医の先生に相談してください。

予防法

黄疸を起こすいくつかの疾患の中には、レプトスピラ、犬伝染性肝炎、汎白血球減少症などワクチンで予防できるものもあります。またフィラリア症は当然予防薬や注射で予防できます。

メモ

犬の場合、先天性疾患として、バセンジヤビーグルのビルビン酸キナーゼ欠乏症。マラムート種のストマトサイト増多症。イングリッシュ・スプリンガー・スパニエルのフォスフォフルクトキナーゼ欠乏症により黄疸が起こることがあります。また、ドーベルマン・ピンシャー、ベトリントン・テリアでは銅関連性肝炎により黄疸が見られることがあります。

猫は重度の黄疸が認められた場合、死亡率が高いという報告があります。猫に黄疸が見られたらより積極的に診断や治療を行う必要があります。



[広告] ▲上記QRコードで携帯から簡単アクセス可能..